

6月に入って

5月末の運動会から早2週間が過ぎ、暦は6月となりました。

各学年、学級では、運動会に向かう過程から当日までの取組を振り返り、担任からのフィードバックによって、自身や集団が伸びた部分の自覚化を図りました。取組の後には、合い言葉である「見つめる 認める<自分も 相手も>」をしっかりと行うことが何より成長につながります。また、自己肯定感や他者肯定感を高めることになります。私たち大人は、このような機会をしっかりと作ることを意識していくようにしましょう。

ちなみに、子どもたちが取り組んだことへの言葉掛けにおいて、「褒める」より「認める」を以前勧めましたが、もう一つ頭に入れておくといことがあります。それは、「子どもの活動によって、私（大人）はどんなプラスの思いや感情をもったかを加えること」です。

具体的には、まず徒競走や団体種目、ダンス等に取り組む姿を見て感じた成長した点や良さを認めます。（「ゴールまでスピードが落ちなかったね。走る力が伸びてるね。」など）その上で、どんな影響を私に与えたのかを付け加えます。（「たくましくなったなあ、とてもうれしくなったよ。」「喜んだよ。」「思わず『よし』と声が出たよ。」「鳥肌が立ったよ。」など）



「何だ、そんなことか」と思われるかもしれませんが、このもう一声は意外と掛けていないことが多いものです。受け手の子どもたちにすると、実は認めてくれた言葉より、大好きな家族に影響を与えたことが分かった言葉の方が強く心に残るようです。それは、自己有用感を得た喜びからくるのだと考えます。

土砂災害を想定した避難訓練を実施して

昭和57年7月23日、3時間に313mmという想定外の豪雨によって河川は氾濫し、山では多くの土砂崩れが起きました。長崎の町は大きな被害を受け、299名の尊い命が失われました。

私の実家は長崎によくある斜面地にあり、裏の山からは滝のように雨水が落ちていました。幸い家は無事でしたが、通学路に使っていた道路の法面が崩れて土砂が堆積し、しばらくは通行できない状況でした。日を追うごとに、その被害の大きさが明らかになっていき、豪雨と土砂災害の恐ろしさを実感しました。

このような過去の被災状況や立地を踏まえて、福田小では毎年「土砂災害を想定した避難訓練」を実施しています。土砂災害の恐れがあるほどの大雨の状況であり、また土砂崩れがいつ発生するかを予測することは難しいため、建物内への避難としています。また、学校以外の場所でも災害に巻き込まれないように、「土砂災害の怖さを知らせる」、「ハザードマップを確認する」、「避難用リュックサックを準備する」、「万が一災害が起きた際の対応を家族で話し合っておく」ことも担当より指導しています。ぜひご家庭でも話題にしてください。

